

ベトナム北部の村で出会った人たち（フォト・エッセイ）

| | |
|-----|--|
| 著者 | 寺本 実 |
| 権利 | Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp |
| 雑誌名 | アジ研ワールド・トレンド |
| 巻 | 132 |
| ページ | 44-47 |
| 発行年 | 2006-09 |
| 出版者 | 日本貿易振興機構アジア経済研究所 |
| URL | http://doi.org/10.20561/00047334 |



■ フォト・エッセイ ■

ベトナム北部の村で出会った人たち

写真・文
寺本実
Minoru Teramoto



孫と過ごす戦争で腕や脚を失った退役兵士たち

昨年、ベトナム北部のある村を訪れた。多くの人に出会った。

Aさんは戦争中ベトナム南部タイニン省で戦闘に参加した。両脚がやせ細り動きが思うにまかせない。米軍が散布した枯葉剤が原因だと考えている。子供も影響を受けた。出産後、奥さんは姿を消した。

Bさんは清楚な可愛いらしい女性。右眼眼球がない。お父さんが中部高原のダクラク省で戦闘に参加した。父親が枯葉剤に被災したことが原因かもしれないと考えている。弟はさらに重い症状だという。

Cさんは六歳の時に頭痛に襲われた。脳軟化症だった。学校に通えなかった。今年五〇回目の誕生日を迎える。

D君は勉強が好きだ。体の自由はあまりきかない。だが国語の勉強に力を入れている。学校に行つて勉強がしたい。

E君は穏やかで優しい。家の中を自由に動く。お父さんがタイニン省で戦闘に参加した。枯葉剤被災者と認定されている。

Fさんはベトナム南部テイエンザン省ミートーで戦闘に参加した。左腕を失い、腹部にも傷を負った。孫と過ごす時間が楽しみだ。

Gさんもミートーで戦った。右脚、腰に深手を負い、松葉杖が欠かせない。戦地再訪を望んでいる。

Hさんは南部における戦闘で右眼と右膝から下を失った。義足を使用している。今は主に家事をこなす。



お母さんと。枯葉剤の影響が認定されている



戦争で右膝下、右眼を失った退役兵士



仲のいい姉たちと弟。枯葉剤の影響が認定されている



爆弾の破片が今も頭に残る

Iさんはベトナム南部ロンアン省、カン
トー省で戦闘に参加し右足付け根から下を
失った。日課は幼稚園に通う孫の送り迎え。
義足をつけて自転車に乗る。

Jさんは一五歳の時に患った病気で視力
を失った。弟夫婦と同居している。義妹は
しきりにKさんの優しさを口にした。六〇
歳まであともう少し。

Kさんは二〇代半ばの青年。中部高原で
軍に勤務し、数年後視力を失った。原因は
分かっていない。罹病後、新妻は姿を消し
た。ベトナム中部トゥアティエンフエ省
で戦闘に参加した経験を持つ母親は枯葉剤
が原因だと主張、国の認定を求めている。

Lさんはドイモイが始まった年に生まれ
た。笑顔がチャーミング。農業に従事する
お父さんは自由に出歩くことを心配してい
る。

Mさんはベトナム戦争が終了した年に生
まれた。穏やかな印象。ベッドの上で過ご
すことが多い。睡眠時間が少なく、両親も
よく眠れない。時々テレビを観る。

Nさんはなかなか咳が止まらない。心臓
が弱く、季節の変化も体に響く。お父さん
が中部トゥアティエンフエ省、クアンチ
省で戦闘に参加した。枯葉剤被災者に認定
されている。

Oさんは還暦をすぎて数年たった。ハノ
イ空爆の際の爆弾破片が頭の中に残る。視
覚に影響が出、左手が自由にならない。家
を二階建てにすることが夢だ。



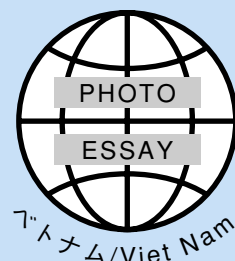
ご両親と。従軍後眼が不自由に。枯葉剤の影響か…



右の眼が不自由。枯葉剤による影響かもしれない



お母さんと。通学してないが元気だ



Pさんは写真やポスターが好きで青年。出かけると気に入ったものを持ち帰り、家の中に貼る。お父さんは病気の治癒を願っている。

Qさんは二〇代前半の若者。体力に自信がない。先生が健康上の理由で進学に反対した。左手が震える。機械、電気関係に関心があり、関連の仕事に就くことが夢だ。

Rさんは一〇歳まであと少し。枯葉剤被災者に認定されている。三人の姉も同様だ。お父さんが中部高原で戦闘に参加した。症状はお姉さんたちより重い。自ら何かできる状態にない。でも家族に愛されている。

Sさんは話すこと、聞くことができない。首都ハノイの病院に何度も通ったが治らなかった。お母さんは台湾に出稼ぎに出た。お父さんは手に職をつけてほしいと願っている。友達が多く、先生も優しい。

Tさんは五〇歳を超えて久しい。外に出ることが多くあまり家にいない。食事は近くに住むお兄さん宅か弟さん宅ですます。お兄さん、弟さん共に従軍した。お兄さんは事故に遭うことを心配している。

Uさんはランソン省で少数民族の奥さんと知り合った。七〇歳まであと数年だ。国防関係の仕事に携わった。公安に勤めていた長男が病死。次男は麻薬で失敗した。お酒、タバコが止められない。

Vさんの生年月日は養母も覚えていない。生まれつき体は弱い。だけど友達と楽しそうに、広いとは言い難い家の中を駆け回る。



ろうの女性。手話は習わなかった



「僕は学校で勉強がしたい」



お母さん、お兄さんと。家畜の世話が得意

家内を照らす細身の裸電球同様にやせているけれど。

Wさんは年の割に体が小さい。じつとしていることが不得意だ。学校に通う年齢だが通学はあきらめた。お腹がすくと炊飯器を持ってきてお茶碗にご飯を盛り付け掻きこむ。お母さんは黙って見つめている。

Xさんはゆっくり話す。文学が好きだ。英語も勉強している。将来の夢は「ティーチャー」。自由に動き回ることはできないけれど友達も多い。

Yさんは九〇歳にもうすぐのお母さんと暮らしている。ベトナム戦争が終わった年に生まれた。体は小さく、読み書きは苦手だ。家の裏で飼う豚の世話はYさんの役割だ。料理、洗濯もできる。近所にお兄さん三人が住む。いろいろと心配してくれる。

Zさんはベトナムが正式に統一された年に生まれた。コミュニケーションは苦手だが、記憶力がよく、家族の生年月日もよく覚えている。自宅付近の地理だって心得ている。村の幹部だったお父さんの話では、一〇代半ばの時に自宅二階から落下したことが健康状態が異変した原因の一つだという。妹さんの未だ小さい娘が心臓の手術を受けなければならぬ。だが必要体重の一〇キロに二〇〇グラム足りていない。

(てらもと みのる／アジア経済研究所
地域研究センター)